

木村素衛に関する文献・資料目録 (上)

大 西 正 倫

〔抄 録〕

木村素衛^{もともり}(1895-1946)は、西洋の教育学説の紹介・移入に尽力したのではなかった。彼は、西田哲学的な立場から教育について考えた、日本のオリジナルな教育哲学者である。敗戦後には、日本の教育の再建の方向を指し示すために来日するアメリカ教育使節団に対応するための日本教育家の委員会、その委員の一人に指名され、大いに期するところがあったが、志を果たさずして、昭和21(1946)年2月、講演旅行中、信州上田で急逝した。享年満50歳11ヵ月。

戦後のどさくさと大転換に紛れて、彼は忘れ去られたと言ってよく、彼のなした仕事の全容が明らかになっているとは、今なお言いがたい。しかし、彼の思想を思想としてつかむためには、まずは彼の著作すなわちテキストを確定しなければならない。本目録の作成は、そのための基礎作業である。

キーワード：ドイツ観念論の超克、美、表現、文化、教育

以下の分類項目によって本目録を作成する。紙幅の制約により、今回は、この前半部としてⅠとⅡ、すなわち木村素衛自身の出版物と論文を掲載する。

- Ⅰ 木村素衛 出版物(翻訳・著書)
- Ⅱ 木村素衛 論文
- Ⅲ 木村素衛 随筆・短文
- Ⅳ 木村素衛 講演筆記
- Ⅴ 京都帝國大学における講義題目
- Ⅵ 木村素衛に関するもの

①以下に挙げる文献・資料は、現時点までに筆者の知りえたものに限られ、未確認の事項も含まれている。それらについては、未確認・未詳・未見などと注記した。なお、下線部^{~~~~~}は、不明・未詳・未確認ないし誤りであることを示す。

②表記については、それぞれの原典に即し、また印字可能な限り、本字(旧字)を用いた。(素衛[、]

と素衛、「就て」と「就いて」と「ついて」、「於て」と「於いて」と「おいて」の使い分け等は原典にならった。）

- ③本目録の作成にあたり、原資料として、木村素衛自身による各著作の序やあとがき、日記のほか、前田博先生の論文（『京都大学教育学部紀要』Ⅳに所収）、水崎富美氏が教育哲学会での発表（後掲）の際に配付された資料、および（次号を含めて）以下に掲げる書物や論文の記載事項を相互に参照した。また、ここにお名前を挙げることは差し控えるが、これまでにご遺族をはじめ多くの方々から有形無形のご支援・ご配慮を賜わってきた。各位に感謝申し上げます。
- ④今回の整理は暫定的なものにとどまる。不備・不明の点、誤りや遺漏について、お気づきの方、ご存知のむきは、是非ご教示下さるようお願い申し上げます。（m-onishi@bukkyo-u.ac.jp）

I. 木村素衛 出版物

〈翻訳〉

- 1 『カント 一般歴史考 其他』（カント著作集13）岩波書店，1926（大正15）年10月30日。
 - * 田中経太郎・高坂正顯との共訳（分担して翻訳）。
 - * 「世界公民的見地に於ける一般歴史考」および
「人間歴史の臆測の起源」を大正15年2月に訳了。（前田論文p.42）
 - ☆ 後者を同年11月10日訳了とする（水崎氏）のは、出版の時期と合わない。（水崎資料）
 - ☆ 後掲の『慈愛と信頼』p.108に記載の発行日10月25日は、印刷日の誤りではないか。
- 2 『フィヒテ 全知識学の基礎 其他』（哲学古典叢書6）岩波書店，1931（昭和6）年1月30日。（筆者は未見）
『フィヒテ 全知識学の基礎』岩波文庫，
 - 上巻，1949（昭和24）年6月5日。1995（平成7）年10月5日，第6刷。
 - 下巻，1949（昭和24）年8月20日。1995（平成7）年10月5日，第4刷。
 - * 序，昭和五年三月 西田幾多郎
譯者序「一千九百三十年十一月十六日 廣島にて 譯者識」
 - ☆ 文庫上巻発行日を前田氏は6月6日としている（前田 p.54）が，6月5日である。

〈著書〉

- 1 『フィヒテ』（西哲叢書XⅥ）弘文堂書房，1937（昭和12）年9月18日。
 - （重版の奥付では，初版発行日は8月20日とされている。）
 - ☆ 初版は6章立て，本文206頁。前田博氏によれば，学位論文「実践的存在の基礎構造」（7章立て）のうち6章までを西哲叢書の一冊として出版したもの。ちなみに『フィヒテ』には含まれていない学位論文の第7章は『教育哲学に対する基礎と展望』と題されていて，…幸にして昭和23年に出版せられた『教育と人間』に収められている。（前田 p.43）とされる。
 - ところが，それに先立って，この『フィヒテ』そのものが，少なくとも第八版（昭和21年8月30日）においてすでに，第七章「教育哲学に對する基礎と展望」を

加え、本文260頁となっていた。(ただし、目次には第七章の記載がないままである。)(ちなみに、筆者の所持するのは初版本および第九版(昭和22年6月20日)であるが、以上の事実は確認できた。)さらに、第十版(昭和28年3月20日)は再び第六章までとなっているという(長男:木村明彦氏)。

学位論文、しかもその最終章が、このような一見不可解な取り扱いを受けているのである。

☆以上の問題をめぐっては、日野信和氏の論文「木村素衛の『学位論文』と『信濃教育会』資料」(『信濃教育』1285号, 1993(平成5)年12月)を参照。ところで『フィヒテ』における第七章の増補が第何版からであったかについては、未詳。第八版についての指摘は、同論文 p.44。ちなみに、吉岡正幸氏によれば、初版発行後の同年11月1日に第七章のみが『フィヒテ 第七章』(207-260頁)として弘文堂書房から発売された(正價金參拾錢)という。氏は、このような経緯から、第七章の増補は第二版からではなかったかと推測している。

*第七章「教育哲學に對する基礎と展望」は、また、雑誌『哲學季刊』第三號、第一年第三冊、1946(昭和21)年11月30日(著者 哲學季刊刊行會(代表者 大島康正)、発行者 田中太右衛門、発行所 (株)秋田屋)に再録された。(再録の際に、二三の語句に変更が加えられている。)

☆初版『フィヒテ』出版前後における研究と出版の経緯や事情についての著者自身による説明は、『フィヒテ』序 pp. 6-7 および『獨逸觀念論の研究』(以下『独逸』と略記)序 pp. 1-2 を参照。なお、この段階の研究は、フィヒテ初期(イェーナ期)の知識学に対する基礎的な研究を中心としていた。(『フィヒテ』序 p. 1 および前田論文 p.43を参照。)

※本目録の著書 No.15『教育と人間』の項、論文 No.15「教育哲學に對する基礎と展望」、16学位論文、および、12「フィヒテの理論哲學」に関する項も参照。

2 『國民と教養』(教養文庫21)弘文堂書房, 1939(昭和14)年7月17日。

◎フィヒテ後期の教育思想の發展(ナポレオンのドイツ進入を契機とする、人類文化的立場から國民文化的立場への転換)を媒介とし、かつ、それを超脱せんとして「最後にフィヒテを抜け出でつつこれを批判し、國民文化と人類文化との矛盾の問題が如何に総合的な解決へ進むべきかについての考へを述べて見た」(序 p. 3)もの。本書は「内容的に國民教育の原理的考察の出発点をなすもの」(前田 p.51)であって、講演「國民教育の根本問題」(昭和15年10月)(著書 No. 6)を経て、主著『國家に於ける文化と教育』(昭和21年2月)とくにその第五章「國民文化と國民教育」へと結実していくものである。(前田 pp.49-51も参照。)

3 『表現愛』岩波書店, 1939(昭和14)年9月30日。

1942(昭和17)年10月30日、第三刷發行(2000部;紙型縮小)。

（1949（昭和24）年11月5日，第四版。郷田年譜（後掲）p.9）

同 南窓社，1968（昭和43）年6月15日。1977（昭和52）年1月15日，第二刷。

同 こぶし書房（こぶし文庫—戦後日本思想の原点—21），編・解説：小林恭，
1997（平成9）年9月25日。

＊南窓社版では，著者による序の前に「序」（高坂正顕）が置かれ，本文の後に「あとがき」（京子（夫人））が添えられた。

＊こぶし書房版には，編者小林恭氏による解説・略年譜・注などが収められた。

◎『『表現愛』は最もよく木村君の持ち味を生かしている』（高坂，序）。

4 『獨逸觀念論の研究』弘文堂書房，1940（昭和15）年12月20日。（以下、『獨逸』と略記する。）

＊初版の「序」は昭和15年10月，「第二版の序」は昭和16年正月。それによれば，第二版では誤植の訂正等のほか，訳語の改訂を施した（bildend を「形像的」から「造像的」へ）とのこと。第三版（昭和22年9月30日）は第二版のままの模様であり，厳密には「第二版第二刷」というべきかもしれない。（筆者は第二版未確認。）

5 『美のかたち』岩波書店，1941（昭和16）年2月25日。

1984（昭和59）年2月10日，第三刷。

同 角川書店（哲學選書），1947（昭和22）年12月10日。

6 『國民教育の根本問題』（教學新書-19-）興亞教學研究會編（代表者 志水義暉），目黒書店，

1941（昭和16）年11月20日。

＊「昭和十五年度教學局主催日本諸學振興委員會第二回教育公開講演會に於ける」
「講演に」「補筆」したもの。

＊本目録，論文の部の同名論文（No.31）の項を参照。

7 『形成的自覺』弘文堂書房，1941（昭和16）年11月30日。

同 能楽書林，1947（昭和22）年7月1日。

＊能楽書林版はほぼ全面的に弘文堂書房版を踏襲しているが，p.85の第二段落において本文に削除がなされており，p.86にかけて誤植・脱字等が見出される。

8 『草刈籠』弘文堂書房，1942（昭和17）年3月25日。

9 『日本文化發展のかたちについて』（日本叢書31）生活社，1945（昭和20）年12月30日。

＊中扉を含めて本文31頁の小冊子。日本の国民文化とその異文化接触における「媒介的創造性」について論じたもの。末尾に「（昭和二〇・一〇・二五）」と脱稿の日付あり。初版7万部。

10 『國家に於ける文化と教育』岩波書店，1946（昭和21）年2月15日（没後三日目）。

1967（昭和42）年7月30日，第三刷。

＊全五章。第五章は「國民文化と國民教育」。後掲論文 No.38 「文化の哲學と教育の哲學」（昭和16年）の項の注記を参照。

◎「このようにして木村教授の教育哲学の体系は完成した。」(前田 p.52)。

＊第三刷には、著者による序の前に「再刊に寄せて」(相原信作)、本文の後に「木村博士の教育哲学」(前田博)が追加掲載されている。(筆者は第二刷を未確認)

11『隨想集 雪解』能樂書林, 1947(昭和22)年2月10日。

12『表現愛の構造』(日本學藝新書1 表現愛新講改題)日本學藝社, 1947(昭和22)年10月5日。

＊『思想』200号(1939(昭和14)年1月)に掲載され、単行本『表現愛』に収録された同名の論文(後掲)があるが、それとは別のもの。内容は、講演筆記「表現愛」(『信濃教育』711・712号, 1946(昭和21)年3月・4月)(後掲)に同じ。

ただし、本書には文章や語句の省略があり、重大な脱落や誤植が散見される。

＊本文末尾(p.106)に添えられた【註】の全文を掲げておく。

本書は故木村素衛先生が逝去直前、長野縣に於て講演せるもので、さきに岩波書店より上梓せる名著「表現愛」についてあますなく解説すると共に、新たに「教育の愛」について詳述されたものを博士未亡人の御許しと大日本教育會長野支部の御諒解を得て上梓せるものであります。従つて故博士が目を通したものでなく速記原文のまゝであることを附記します。

☆『慈愛と信頼』(後掲)p.109, および『木村素衛先生と信州』(後掲)p.133に記載の本書発行日10月1日は、印刷日の誤りと思われる。

※講演筆記「表現愛」の項を参照。

13『教育學の根本問題』(精神科學選書Ⅱ)黎明書房, 1947(昭和22)年10月15日。

(黎明教育シリーズ2として) 増補再版, 1949(昭和24)年4月30日。

＊京都帝国大学における講義に基づくもの。小田武氏筆記, 高坂正顯氏閲読。

「あとがき」は下程勇吉氏。

☆昭和17年度の教育学教授法の普通講義(小田氏に確認した)。内容からすれば、「國民教育の根本の立場」(第六章)についての思索が深まり、木村教育哲学がほぼ完成に近づきつつあった頃。

＊初版にすでに「附録」として「教育愛」が収録されている。これはもと『信濃教育』722号(昭和22年2月)に掲載された講演筆記である(後述)。

増補再版では「教育の本質と學校教師」の一篇がさらに付加され、(出版社側の意向によってか)別のシリーズの一冊となった。

☆附録の後者の出典を確認のこと。その内容からして、戦後に行なわれた講演である。後掲の『慈愛と信頼』所収の「入信年譜」p.106によれば、1946(昭和21)年1月26日から29日にかけて——「高熱のため講義中止」という文言を、く中断および再開と解しておく——下高井平隱国民学校(『信濃教育』1305号, p.91および『木村素衛先生と信州』p.131では、「平穩(ひらお)国民学校」と訂正されている)にて「教育の本質と學校教師のあり方」と題する講義が行なわれた。吉岡正幸氏によれば、1月28・29日(ともに午前)とのこと。おそらく、その筆記であろう。

『恩師への追慕』（後掲）は、その内容の一つとして講演筆記「教育の本質と学校教師」（昭和21年1月29・30日、往郷国民学校）を挙げている（後掲の郷田豊氏の紀要論文 p.65も参照）が、上の「入信年譜」とのあいだに齟齬がある。

※信濃教育会版の『教育学の根本問題』（後掲）をも参照。

14『花と死と運命』（アテネ文庫5）弘文堂書房、1948（昭和23）年3月25日。

弘文堂、1954（昭和29）年12月15日、第六版（第六刷）。

15『教育と人間』（株弘文堂、1948（昭和23）年12月25日。

＊遺稿二篇（下記）を収録したとされるもの。書名の命名および「あと書」は高坂正顯氏による。

「教育の本質について」（高坂氏による仮題）：「昭和十四年頃のもの」。（前田 p.44も参照）

「教育哲學に對する基礎と展望」：「昭和十一、二年頃の執筆」。

「確か同君の學位論文の一部を構成すべき筈のものであつたと記憶するが、内容的には西哲叢書の『フィヒテ』に直續するのである。」（あと書）

※本目録著書の部の『フィヒテ』、論文の部の「教育哲學に對する基礎と展望」および學位論文に関する注記を参照。

16『紅い實と青い實』（アテネ文庫48）弘文堂、1949（昭和24）年3月15日。

17『ミケルアンジェエロ』（アテネ文庫113）弘文堂、1950（昭和25）年7月10日。

＊『表現愛』より「ミケルアンジェエロの同心」および「一打の鑿——制作作用の辯證法——」を再録して一書としたもの。「後記」は京子（夫人）。

18『魂の靜かなる時に』弘文堂、1950（昭和25）年10月20日。

＊No. 8 と11は随想集、14・16・18は没後に出版された日記抄である。14の跋および11・16・18の後記は京子夫人による。18には「追憶」と題する相原信作氏の文章が併載され、編集後記が鈴木成高氏によって書かれている。

☆なお、「弘文堂書房」は、戦後（昭和23年6月15日以降同年12月25日までのある時点で）社名を「弘文堂」と正式に変更したものと考えられる。この区別を表記の上に示しているのは前田氏のみであった。

上記の他に、信濃教育会（出版部）から下記のものが現在までに刊行（会員を主たる対象として発売）されている。

1『恩師への追慕』編輯兼發行人 上條茂、信濃教育会出版部發行、1948（昭和23）年6月12日。

＊講演筆記の項に後述する五つの講演（掲載はNo.11, 12, 14, 8, 10の順）と、「信濃路の歌」として短歌72首・俳句5句を収録、と跋（上條茂）にあり。実際は、短歌66、歌（詩）9、俳句5という（吉岡正幸氏）。（郷田論文 p.65および『木村素衛先生と信州』 p.133を参照。筆者は未見）

2『表現愛と教育愛』木村素衛先生論文集刊行会發行、1965（昭和40）年4月30日。

1967（昭和42）年5月30日、第3版。（郷田論文 p.65）

*『表現愛』より、著者による献辞と序、および「ミケルアンジェロの回心」を除き、新たに「木村君を偲んで」(高坂正顕)と「序」(下村寅太郎)を加え、『信濃教育』722号の「教育愛について(表現愛補遺)」を「教育愛」と改題の上、収録し、『形成的自覚』より「科学と表現」を収録したもの。

(なお、「教育愛」は前掲の『教育学の根本問題』にすでに収録されているが、この後も、信濃教育会版の『教育学の根本問題』および『慈愛と信頼』に再録される。)

3 『花と死と運命 日記抄』 木村素衛先生日記抄刊行会発行、1966(昭和41)年1月30日。

1992(平成4)年2月15日第5刷。(『慈愛と信頼』p.109)

*『魂の静かなる時に』(編集後記まで含む 全て)

『紅い実と青い実』

『花と死と運命』

「夕映」……(それまで未発表であったもの；次の『草刈籠』の編集後記を参照)

年譜

後記 京子

*なお、本書の奥付に「発売 信濃教育会出版部」という記載はない。(吉岡正幸氏によれば、刊行会が県内有志に頒布したもので、販売したのではないから。)

☆『慈愛と信頼』p.109によれば本書は昭和40年1月30日発行とされているが、次の『草刈籠』の編集後記に記された事実とのあいだに齟齬があり、誤りである。

『木村素衛先生と信州』p.133では訂正されている。

4 『草刈籠 随筆集』 木村素衛先生随筆集刊行会発行、1966(昭和41)年11月5日。

*序 高坂正顕

『草刈籠』

『雪解』

『表現愛』より「ミケルアンジェロの回心」

『美のかたち』より「形成」および「映画の視覚」

『形成的自覚』より「アマテュアについて」

後記 京子

編集後記 木村素衛先生著書刊行会 代表 新井 保

☆『慈愛と信頼』p.109の掲げる本書発行日昭和40年4月30日、および『木村素衛先生と信州』p.133の昭和41年11月15日は誤り。

5 『教育学の根本問題』 木村素衛先生著書刊行会発行、1976(昭和51)年11月20日。

*本書は、黎明書房昭和24年増補再版を再刊したもの。頁数も一致している。

*附録二篇も変更なし。「教育愛」および「教育の本質と学校教師」。

今回の「あとがき」は下村寅太郎氏。

☆筆者の所持する第二版(第二刷)(昭和55年4月1日)の奥付の記載では、本書初版発行日は11月15日となっているが、誤りである。印刷日と発行日とを取り違えたものか。

6『慈愛と信頼——論文・随筆選集』木村素衛先生50回忌記念刊行会編集、

(社)信濃教育会出版部発行、1995(平成7)年2月12日。

*「教育愛」……上掲No.2 および5に収められたものの再録。

「知育と徳育とについて」……(出典が示されていないが)『形成的自覚』より

「草刈籠」……『草刈籠』より5篇、『随想集 雪解』より6篇

木村素衛入信年譜……信州における講義・講演の年月日・場所・題目が掲げられている。

主な論文・著作の紹介……(リスト)

あとがき 世話人代表 太田美明

7『木村素衛先生と信州』木村素衛先生50回忌記念刊行会編集、

(社)信濃教育会出版部発行、1996(平成8)年12月5日。

☆この書物は、内容からすれば木村素衛の純然たる著書とは言えないが、五十回忌にちなんだ記念出版として、上掲『慈愛と信頼』の「続編」として編まれた経緯から、それに続けて掲げておくことにする。内容は以下の通り。

*まえがき 木村素衛先生五十回忌記念刊行会

論文「身体と精神」(後掲)を再録。

講演筆記「教育愛に就いて」(後掲)に副題「—エロスとアガペー—」を添えて再録。

「『兄・木村素衛』を語る」 木村有香(ききて：太田美明・木村明彦)

「木村素衛先生とのご縁」 平田嘉三

「個性的、個別的な存在」 渡邊守夫

「伝統を継承するということ—木村素衛にこれから接しようとする若い先生方へ—」 大西正倫

「愛について」 吉岡正幸

「木村素衛先生に学ぶ」 田中繁雄

「指先と手心」 井出静男

報告 木村素衛博士五十回忌法要

木村素衛先生略年譜・信州での足跡

主な著作(没後発行) ほか

あとがき 木村素衛先生五十回忌記念刊行会代表 太田美明

以下、近年の再刊・再編集版

1『魂の静かなる時に』(燈影撰書18)一燈園燈影舎、1989(平成元)年11月10日。

信濃教育会版 No.3『花と死と運命 日記抄』より「花と死と運命」および年譜を除き、「魂の静かなる時に」「紅い実と青い実」「夕映」を収録したもの。目次(内容)は次の通り。

*序にかえて 下村寅太郎

魂の静かなる時に

紅い実と青い実

夕映え

あとがき 木村京子(上記の書の後記に、新たに補筆されたもの)

編集後記 「燈影撰書」編集部

- 2 村瀬裕也編・解説『美の形成』(こぶし文庫26)こぶし書房, 2000(平成12)年7月10日。

『美のかたち』(岩波書店, 1941年)と『形成的自覚』(弘文堂書房, 1941年)を定本とし,
「『美のかたち』所収の全論文を第Ⅱ部と第Ⅲ部に、『形成的自覚』のなかの四論文を
第Ⅰ部と第Ⅲ部に、それぞれ配列し、新たに編集したものである。」

編者による「解説・注」が付されている。

- 3 岩城見一編・解説『美のプラクシス』(京都哲学撰書第七巻)(株)燈影舎, 2000(平成12)年7月25日。

『美のかたち』(角川書店版, 1947年)から5篇

『表現愛』(岩波書店, 1939年)から2篇

『慈愛と信頼』(信濃教育会出版部, 1995年)から7篇を再録し、

編者による「解説」と「木村素衛略年譜」および事項索引・人名索引を付したものを。

Ⅱ. 木村素衛 論文

論文題目と執筆時期, その収録された単行本・講座・雑誌等の書名と発行年月を示す。

なお、後に推敲を経て印刷されたものについては→の記号を、

また、テーマが継承され発展したものについては⇒の記号を付して、その旨を示した。

- 1 「含蓄から顯現へ」…「大学2回生時」(大正10年あるいは11年?)。(『独逸』序および前田。筆者は未見)

→後に手を加えて、大正13年11月に脱稿。(下記著書の本章末尾に付記された年月。)

*下記『思想』には「一九二四・一一・卅」の日付あり。

『思想』第39号, 岩波書店, 1925(大正14)年1月。

「——ヘーゲルの辯證法——」の副題を添え、

→『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月に収録。

- 2 「カントの NOUMENA と先驗的自由とに就て」

*「卒業論文の一部」。

(『独逸』序および前田。筆者は未見)

☆卒業論文の全体および題目は未詳。提出は1923(大正12)年1月末日か?

口頭試問は3月23日。以上、日記抄『魂の静かなる時に』を参照。

*下記『哲學研究』には「一九二三・六・一〇脱稿」との付記あり。

京都帝國大學文學部内 京都哲學會『哲學研究』第88号, 第8巻第7冊, 1923(大正12)年7月。

→『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月。

*なお『哲學研究』は或る時期まで内外出版(株)発行、その後(株)弘文堂書房発行に変わったものと考えられる。京都大学附属図書館に製本所蔵のものは各号の表紙・裏表紙の欠けたものが多く、その時期は明確に確認できなかった。

3 「カントに於ける transszendentaler Gegenstand と „affiziert werden“ とに就て」

1925(大正14)年1月14日。

*1925・1・14付けの付記によれば、「こゝに取り扱つた問題は」もと「大谷大學の『哲學研究室の會』で述べたもの」。(1924年4月～1929年3月、大谷大學講師)

『哲學研究』第107号、第10巻第2冊、1925(大正14)年2月。

transszendentaler Gegenstand を der transszendentale Gegenstand と改題の上、

→『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月に収録。

4 「カントに於ける具體的普遍」1926(大正15)年1月9日。

『思想』第52号、1926(大正15)年2月。

→『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月。

5 「観ることと作ること——カント美學に關する一考察——」1928(昭和3)年1月10日。

『思想』第76・77号、1928(昭和3)年2月・3月。

→『美のかたち』1941(昭和16)年2月。

6 「フィヒテに關する覺書第一」1929(昭和4)年11月24日。

廣島文理科大學 精神科學會編輯『精神科學』1930(昭和5)年第1巻、目黒書店、同年1月(?)。

⇒「フィヒテの知識學の本質」1934(昭和9)年12月。

*なお『精神科學』は第4巻(昭和4年)までは廣島文理科大學(教育博物館)内精神科學編輯室編輯、アイデア書院発行。「昭和5年第1巻」は廣島文理科大學 精神科學會編輯、目黒書店発行。「昭和5年第2巻」以降は廣島文理科大學・廣島高等師範學校 精神科學會編輯(目黒書店発行)となった模様である。

7 「理論と實踐——フィヒテ哲學の根本思想——」1930(昭和5)年11月。

『朝永博士還暦記念論文集』〰〰年〰月。(『独逸』序および前田。筆者は未確認)

『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月。

⇒『フィヒテ』1937(昭和12)年9月。(『独逸』序pp.1-2および前田p.42)

8 「ヘーゲルに於ける藝術美のイデー」1931(昭和6)年9月8日。

『思想』第113号〈百年祭記念 ヘーゲル研究〉、1931(昭和6)年10月。

*弟菊之介の死に言及した「——一九三一・九・八・廣島にて——」の付記あり。

→『美のかたち』1941(昭和16)年2月。

9 「一打の鑿——制作作用に關する一つの覺書——」1931(昭和6)年11月23日。

*下記の『精神科學』には、脱稿日より後の、「12月14日夜」の追記あり。

『精神科學』1932(昭和7)年第1巻、1月。(昭和7年12月31日の日記も参照)

⇒「制作作用の辯證法」1933(昭和8)年6月。(前田p.45を参照)

*「一打の鑿」の着想については昭和6年3月21日の日記(『紅い實と青い實』所収)を参照。
(南窓社版『表現愛』pp.241-242にも収められているが、そこにはいくつかの異同と、大きく二箇所の中略がある。こぶし書房版は南窓社版を踏襲している。)

10「意志と行爲」1932(昭和7)年3月末。(下記『岩波講座 哲學』末尾の日付)

☆昭和7年12月31日の日記(『紅い實と青い實』に所収)にはこの論文につき「これは東大の伊藤氏が認めたと見えて思想に紹介した。」とあるが、『思想』501号所収の総目次および執筆者別索引によつては、該当するものは確認できなかった。

*「…自由意志の問題が専ら深く私にこびりついていた。…『意志と行爲』が大體廣島でのこの問題に對する思索のスケッチである。」(昭和9年6月15日の日記：『花と死と運命』に所収)

編輯兼發行印刷者 岩波茂雄『岩波講座 哲學〔體系的研究—社会と歴史の問題—〕』第六回配本の六、
1932(昭和7)年5月20日。

*(中扉を含めて)本文45頁の冊子。各回の配本は数冊の分冊から成っていた。

→『表現愛』岩波書店、1939(昭和14)年9月。

『表現愛と教育愛』(信濃教育会版)1965(昭和40)年4月に再録。

『表現愛』南窓社、1968(昭和43)年6月。

『表現愛』こぶし書房、1997(平成9)年9月。

※岩波書店版『表現愛』に収載された論文は、当然、南窓社版およびこぶし書房版の『表現愛』にも収録される。以下、これら二書への再録に関しては、記述を省略する。

11「制作作用の辯證法」1933(昭和8)年6月1日。

*下記『思想』には、6月1日付けの付記あり。

『思想』第134号〈特輯 藝術論〉、1933(昭和8)年7月。

*「もともと一打の鑿を更に嚴密にしたものである」。

昭和8年6月8日の日記(南窓社版『表現愛』pp.244-246、こぶし書房版p.203)を参照。

「一打の鑿——制作作用の辯證法——」と改題の上、

→『表現愛』1939(昭和14)年9月に収録。(前田 p.45)

☆『思想』掲載論文にあったツァラトウストラへの言及が削除されている。

『ミケルアンジェロ』(アテネ文庫113)1950(昭和25)年7月に再録。

『表現愛と教育愛』1965(昭和40)年4月に再録。

☆水崎氏は「一打の鑿」1931(昭和6)年11月30日が『表現愛』および『ミケランジェロ』に収録されたとしたが、それはこちらの論文ではないか？

12「フィヒテの理論哲學」1933(昭和8)年～1934(昭和9)年2月。

*「未発表の旧稿」であったもの(『独逸』序)。

☆日野論文によれば、木村はフィヒテに関する著作を最初は二部立てのものとして構想し、第二部の中心に本論文を据えるつもりであったという。『フィヒテ』序 pp.6-7、前田 p.43も参照。

→『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月。

13「フィヒテ哲學の根本原理に關する一つの考察」~~~~~年~~~月。(稿了日の記載なし。)

『哲學研究』第217号、第19卷第4号、1934(昭和9)年4月。

☆『慈愛と信頼』p.108はこれを昭和11年(一九三六)としているが、誤りである。

14「フィヒテの知識學の本質」~~~~~年~~~月。(稿了日の記載なし。)

『思想』第151号、1934(昭和9)年12月。

*付記によれば「フィヒテに關する覺書第一」を書き改めたもので、「フィヒテ哲學の根本原理に關する一つの考察」「に先行すべき論文」である。

しかしその「先行」という語は必ずしも13と14の執筆・稿了の順を意味しない。

ここでは13と14を發表順に掲げておく。

15「教育哲學に對する基礎と展望」

※「學位論文の第7章」にあたるもの(前田p.43)であるが、これの取り扱われ方の複雑さから、本目録では、學位論文と切り離し、獨立した論文として掲げておく。

*執筆時期については

「昭和十一、二年頃」(高坂正顯氏による『教育と人間』の「あと書」)。

「昭和11年秋から昭和12年春にかけて書かれたもの」(前田 p.43)。

「昭和十二年五月末」(後掲の井口東穂「木村素衛先生私記」『信濃教育』第1054号、p.26。)

☆『フィヒテ』序(昭和12年8月)p.6によれば「昨秋から今春にかけて」「書き加へ」られたのは第五第六の二つの章であった。したがって、第七章にあたる本論文の執筆時期は、それと同時期以降かつ學位論文の提出時期とされる昭和12年5月末までの間、ということになる。

☆執筆時期が上記の通りであるとすれば、學位論文の提出日(第七章の稿了時期)に關する日野氏の推測(前掲論文 p.49)は外れていることになる。

『フィヒテ 第七章』弘文堂書房、1937(昭和12)年11月1日。

『哲學季刊』第三號、1946(昭和21)年11月30日に再録(既述)。

『教育と人間』1948(昭和23)年12月にも再録。

☆『教育と人間』の「あと書」によればこの論文は遺稿とされるが、上記のように『フィヒテ 第七章』として出版されたとすれば、「遺稿」とは言えない。

*次の學位論文の第七章と対照すれば、『教育と人間』に所収の「教育哲學に對する基礎と展望」には、語句に關して、収録する際に編者が前後關係に配慮して改めたものと思われる箇所、およびいくつかの削除あるいは脱落がある。

※著書『フィヒテ』および『教育と人間』の項、そして次の学位論文の項を参照。

16 〈学位論文〉「實踐的存在の基礎構造——教育哲學の考察に向けられたるフィヒテ哲學の一つの研究」 1937(昭和12)年5月末。

※文学博士の学位授与は1940(昭和15)年3月13日。(15日と訂正した跡があるという日野 p.45 も参照。) (論文提出から学位授与まで、三年近くかかっている。なぜか。)

※前田氏によれば、「論文は7章に分かれ、そのうち6章までを『フィヒテ』と題して昭和12年9月に出版した。」(前田 p.43)。

※肉筆原稿は信濃教育会館に保管されている。

☆上記副題のうち「教育哲學の考察に向けられたる」の文言は、自筆原稿の表紙に、後から書き加えられたもの(校正・補筆の要領で)である。(信濃教育会館における「木村素衛先生を偲ぶ50回忌記念展」(1995.5.20～7.2)にて確認した。)

※学位論文は印刷・製本され、京都大学附属図書館に収蔵されている。本文は増補版『フィヒテ』(全7章)と全く同じ。(文字の歪みやカスレまで一致しているので、同一の組版を用いて印刷したものと推定できる。)

☆序については、「学位論文の序の第2段は『フィヒテ』では省かれ、学位論文にはなかった1段が『フィヒテ』の序では最後の段として付け加えられている」(前田論文 p.43)ほか、第3段落における第七章への言及が『フィヒテ』では削除されており、「第六章」という語が「最後の章」と改められている。

なお、序に関しても、日野論文を参照。

※『フィヒテ』では省かれた学位論文の序の第2段落の全文をここに掲げておく。

ところで人類の教師として立たうと云ふことはフィヒテの年少の時からして一生を通して把持された強い念願であつた。彼れの思索の底をいつもこの關心が流れてゐた。教育學の歴史に於て占める彼れの位置も亦決して輕々しいものではない。かう云ふところからしてこの論文はまた教育哲學の基礎に關する考察を同時に志してゐる。併しテキストの上から云へば、教育に直接關係のある論文はその他の實踐的諸問題に關する論述と共に多く後期に屬し、前期に於ては僅かに一個の講演を見得るに過ぎない。かかる事情の故に、本來専ら初期の思想に現はれた實踐的存在の基礎構造の闡明を意圖としたこの論文に於ては、實踐に關する他の特殊諸領域の究明に進むことができなかったと同様に、また特に教育哲學に關する特殊な諸問題の考察に従事することはできなかった。唯併し初期の教育學的論述が吾々に提供する限度に於ては、この方面に關する若干の基礎的考察と若干の展望を開くことに勉めて見た。

17 「教育と歴史性」 1937(昭和12)年9月29日。

※初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。(『形成的自覺』序 p.2 を参照)

『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月。

18 「ミケランジェロの回心」 1938(昭和13)年3月27日。(下記論文の論文末尾の日付)

石原謙編『哲學及び宗教と其歴史—波多野精一先生獻呈論文集—』岩波書店、

1938(昭和13)年9月10日。(井口論文 p.27 も参照)

「ミケルアンジェロの回心」と改題の上、写真を五葉添付し、

→『表現愛』1939(昭和14)年9月に収録。

*ここでも、ツァラトゥストラへの言及(上記論文集のp.10)を削除。

『ミケルアンジェロ』(アテネ文庫113)1950(昭和25)年7月に再録。

『草刈籠 随筆集』(信濃教育会版)1966(昭和41)年11月にも再録。

☆『慈愛と信頼』p.108に、昭和13年として「ミケランジェロの回心 表現愛の構造 思想1月号」という記載があるが、この記載は、“二つの論文が同時に『思想』昭和13年1月号に掲載された”という誤解を生じさせるものである。なお、後掲(本目録(下))の郷田論文「木村素衛と信州」p.69にも同様の記載があるが、それらの発表時期から考えれば、『慈愛と信頼』の方が郷田論文を踏襲したのであろう。

19「フィヒテを語る」1938(昭和13)年6月26日。

『理想』第87号「哲學の周邊—哲學的隨筆集—」, 1938(昭和13)年8月。

(京都大学附属図書館に所蔵のものは、『理想』第十二年中巻(第84-87号)として総目次つきで製本されていた。)

☆印刷で6頁の短編であるが、後期フィヒテの原理的転換の向こうに表現愛・絶対的無と世界史的原理を見通すという内容からして、論文の部に含めておく。

20「教育と全體觀」1938(昭和13)年6月29日。(下記『学校教育』の論文末尾の日付)

廣島高等師範學校附屬小學校 學校教育研究會編輯『学校教育』311号(特集「教育と全體觀」),

1938(昭和13)年9月。

21「身體と精神」1938(昭和13)年11月13日。(下記『人間の諸問題』の論文末尾の日付)

小泉丹・高橋里美・吉江喬松・和辻哲郎監修, 編輯兼發行者 理想社出版部『人間の諸問題(人間學講座V)』

理想社出版部, 1939(昭和14)年2月28日。(『表現愛』序を参照)

補筆を数箇所にし、「表現愛」の「第一部」として、→『表現愛』1939(昭和14)年9月に収録。

(補筆箇所は岩波書店版のp.23, p.25, p.26)

『表現愛と教育愛』1965(昭和40)年4月に再録。

『木村素衛先生と信州』1996(平成8)年12月にも再録。

☆南窓社版『表現愛』の序(p.4)で高坂正顕氏は、この論文が「雑誌『思想』に発表された」と述べるが、これは氏の記憶違い(次の論文との混同)ではないか?

◎『「身體と精神」拜受シタ 木村 コノ論文ハヨイゾ……』という西田幾多郎からの手紙を木村は昭和14年3月20日に受け取った。(同日の日記。南窓社版『表現愛』のあとがきp.251を参照。なお、この頃の日記は、残念ながら、公刊されていない。)

『西田幾多郎全集』第十九卷, 岩波書店, 1966(昭和41)年, p.70によれば、その書状の全文は次の通りである。

「身體と精神」拜受した 木村 コノ論文ハヨイゾ 私は全く君と手を握り合つた様に感じた 加之君一流の才があらはれて居る これまで君の論文で物足らなく思つてゐたものがみたまへて來た様に

おもふ かういふ立場から徹底的に考へ貫いてゆかれんことを望む 三月十九日 西田生 木村君
(『木村素衛先生と信州』 pp.16-17は、この書簡のコピーを掲載し、書き下し文を添えているが、「加之」(しかのみならず)を「加え」と読み誤っている。)

※同年3月22日付け高坂正顯宛の西田の葉書にも、次のようにある。(『全集』, p.71)
…木村君の「身體と精神」をおよみでしたか 同君も全く我々の圏内に入つた様です

22 「表現愛の構造」1938(昭和13)年12月。

※南窓社版『表現愛』p.249に所収の12月6日の日記には「今朝漸く書き上げた。」とあるが、下記『思想』には「——昭和13・12・7——」と付記されている。

『思想』第200号, 1939(昭和14)年1月。 (『表現愛』序も参照)

「表現愛 第二部」として→『表現愛』1939(昭和14)年9月に収録。(補筆箇所は岩波書店版のp.49)

『表現愛と教育愛』1965(昭和40)年4月に再録。

⇒「文化の本質と教育の本質」1939(昭和14)年11月。 (前田 p.46)

23 (遺稿)「教育の本質について」(高坂氏による仮題)「昭和十四年頃」(高坂氏, あと書)。

『教育と人間』1948(昭和23)年12月。

※本目録, 著書の部の『教育と人間』を参照。

24 「文化の本質と教育の本質」: 1939(昭和14)年11月1日。(下記講演の日付)

※京都哲學會秋季大會講演の原稿。 (『形成的自覺』序 p.2)

『哲學研究』第286・287号, 第25巻第1・2冊, 1940(昭和15)年1・2月。

→『形成的自覺』1941(昭和16)年11月。

⇒「文化の哲學と教育の哲學」1941(昭和16)年。 (前田 pp.47-49)

25 「形成——東洋的なるものに關する一つの問題の提出——」1939(昭和14)年12月。

『形成』第3号, 古今書院, 1940(昭和15)年2月。

(吉岡正幸氏のご教示。筆者は未見)

『美のかたち』1941(昭和16)年2月。

『草刈籠 隨筆集』(信濃教育会版)1966(昭和41)年11月に再録。

26 「形式と理想」1940(昭和15)年2月26日。

『藝術哲學』(藝術論(全五巻の)第一巻)東京河出書房, 1940(昭和15)年5月20日。

(吉岡正幸氏のご教示。筆者は未見)

『美のかたち』1941(昭和16)年2月。

27 「知育と徳育とについて」1940(昭和15)年3月15日。

※初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。 (『形成的自覺』序 p.2 を参照)

『形成的自覺』1941(昭和16)年11月。

『慈愛と信頼』1995(平成7)年2月に再録。

28 「教師と教養の問題」1940(昭和15)年6月30日。

＊初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。

（『形成的自覺』序 p.2 を参照）

『形成的自覺』1941(昭和16)年11月。

29 「自己同一」1940(昭和15)年9月。

＊シェリングに関するもの。「結びにおいて、そこから東洋的な無へ進まざるを得ないことを述べている」(前田 p.45)。

『獨逸觀念論の研究』1940(昭和15)年12月。

＊この書が「全體として『獨逸觀念論の研究』といふやうな纏りを持つものではない」「點を補ひ得ればと思つて、急に起草して、序論的なつもりで巻頭へ収めた」(同書、序 p.3)、「本書の出版のために最近書いたもの」(序 p.1)。

初版で論文末尾に付され脱稿時期を示す「昭和十年九月」は、「昭和十五年九月」の誤り(脱字)。再版本では訂正されている。

☆前田論文 p.42, p.45ではこの論文の執筆時期は「昭和10年9月」とされているが、上記の誤植に起因する誤りと思われる。

30 「アマテュアに就て」1940(昭和15)年10月18日。

『信濃教育』650号, 1940(昭和15)年12月。

「アマテュアについて」と改め、『形成的自覺』1941(昭和16)年11月に収録。

『草刈籠 隨筆集』(信濃教育会版)1966(昭和41)年11月に再録。

☆この掌篇は、その長さからしても雰囲気からしても、論文というよりむしろ隨筆に属すべき作品であるが、これを収めた『形成的自覺』を著者が「短論文の蒐録」(序 p.2)、「この論文集」(序 p.3)と性格づけているところからして、論文の部に分類しておく。

31 「國民教育の根本問題」：1940(昭和15)年10月〃日。(下記講演の日付)

＊文部省の日本諸學振興(委員)會の教育學會における公開講演の原稿。

(『形成的自覺』序, 前田 p.47, p.51)

興亞教學研究會編(代表者 志水義暉)『國民教育の根本問題』(教學新書-19) 目黒書店,

1941(昭和16)年11月20日。

＊「昭和十五年度教學局主催日本諸學振興委員會第二回教育公開講演會に於ける」
「講演に」「補筆」したもの。

大幅に手を加えて→『形成的自覺』1941(昭和16)年11月(30日)。

☆さきの著書は本文82頁(400字で83枚位)で十二の部分(節)に分かれていたが、『形成的自覺』に所収の同名論文は、そのうち「今日の新しい國民學校の教科組織」の考察(「十」以降)を除き、「九」までの内容をコンパクトに書き改めたものであって、字数も400字で35枚弱となっている。

⇒『國家に於ける文化と教育』第五章。

(前田 pp.51-53)

＊本目録, 著書の部の, 同名著書の項も参照。

32 「映画の視覚」 1940(昭和15)年11月。

＊「或る映画の研究會の爲めに話したものを後に文章にして見たもの」。

(『美のかたち』序 p.4)

『美のかたち』 1941(昭和16)年2月。

『草刈籠 隨筆集』(信濃教育会版)1966(昭和41)年11月に再録。

33 「科學と構想力」 1941(昭和16)年4月13日。

＊初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。

(『形成的自覺』序 p.2 参照)

『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月。

34 「カント——理性の實驗——」 1941(昭和16)年4月23日。(『形成的自覺』に記載の脱稿日)

河合榮治郎編著『學生と哲學』日本評論社, 1941(昭和16)年10月。

「理性の實驗」と改題し, →『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月に収録。

35 「哲學すること」 1941(昭和16)年4月30日。

河合榮治郎編著『學生と哲學』日本評論社, 1941(昭和16)年10月。

→『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月。

36 「フィヒテの回想」 1941(昭和16)年6月。

＊初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。

(『形成的自覺』序 p.2 参照)

『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月。

37 「古典研究の意義」 1941(昭和16)年7月5日。

＊初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。

(『形成的自覺』序 p.2 参照)

『形成的自覺』 1941(昭和16)年11月。

38 「文化の哲學と教育の哲學」(上) 1941(昭和16)年4月8日。

同 (下) 1941(昭和16)年8月31日。

編輯兼發行者岩波茂雄『岩波講座 倫理學』第7冊, 岩波書店, 1941(昭和16)年7月10日。

同 第11冊, 岩波書店, 1941(昭和16)年10月27日。

→『國家に於ける文化と教育』第一章・第二章,

同 第三章・第四章。

＊『岩波講座 倫理學』と『國家に於ける文化と教育』(第四章まで)とのあいだに, 全体の構成と章・節の各題目において変更はない。本文には推敲の跡がある。

☆(下)の末尾には「昭和一六・八・三一」の日付と次の「追記」が添えられている。

「國民文化と國民教育とに關する第五章の一切は, 紙數の都合上遂に斷念するほかなかつた。私は最初からこの章に主力を注ぐつもりでゐた。四章まではその準備にほかならないのである。…(中略)…第五章は併し遅くとも來春には脱稿し, 他の形で以て全章を纏めて公にし, このたびの不始末をお詫びしようと思つてゐる。」——そしてそれが『國家に於ける文化と教育』全五章であることは言うまでもない。戦争のために脱稿と公刊は甚だしく遅延したが, 木村が力点を

その第五章においていたことは、この文章によっても明らかである。

39「科学と表現」1941(昭和16)年9月26日。

* 初出は何らかの叢書か雑誌など。未詳。

(『形成的自覚』序 p.2 参照)

『形成的自覚』1941(昭和16)年11月。

『表現愛と教育愛』1965(昭和40)年4月に再録。

☆1942(昭和17)年1月12日の日記(「夕映」信濃教育会版『花と死と運命』p.239)に、「午前中論文(「教材」)」とある。これについては未詳。公刊の事実が判明すれば、これがNo.40となる。

40「国民の世界史的性格について」~~~~~年 月。(稿了日の記載なし。)

京都帝國大學 人文科學研究所『東亞人文學報』第2巻第4号, 1943(昭和18)年3月25日。

* まえがきに「この一文はここ一兩年書き進めてゐる相當大部の原稿の一斷片である。…」とあるように、『國家に於ける文化と教育』第五章の第一節「主體としての世界史的國民」にはほぼ対応するもの。ただし、項の設定や段落の付け方、言い回しには異同がある。

41「國民文化に就て」~~~~~年 月。(稿了日の記載なし。)

『哲學研究』第328・329号, 第28巻第7・8冊, 1943(昭和18)年7・8月。

* まえがきによれば、「ここに發表されたものは目下起草しつつある一聯の長篇の一部分であつて、その成立は二つの既に發表された論述を前提としてゐる。一つは…『文化の哲學と教育の哲學』…、今一つは…『國民の世界史的性格について』である。…」

*『國家に於ける文化と教育』第五章の第二節「國民文化の世界史的性格」(一～五, 六～七)にはほぼ対応。項の設定や段落などについては、異同がある。

42「國家と世界 一つの斷章」~~~~~年 月。(稿了日の記載なし。)

『哲學研究』第335・336号, 第29巻第2・3冊, 1944(昭和19)年2・3月。

*『國家に於ける文化と教育』第五章の第五節「國家哲學思想の歴史的發展」(一～三 および四)にはほぼ対応するもの。項の設定や段落などについては、異同がある。

☆『慈愛と信頼』p.108はこれを昭和20年としているが、誤りである。

なお、以上に関して『慈愛と信頼』pp.108-109は、「文化の哲學と教育の哲學」のみ稿了日を掲げ、それ以外はすべて発行年月日を示しているものと思われる。

43「大東亞建設と文教政策」1944(昭和19)年7月。

日本教育學會編輯『教育學研究』第13巻第1号, 目黒書店, 1944(昭和19)年10月。

* 昭和19年7月5日の日記(「夕映」信濃教育会版『花と死と運命』p.251)に「『大東亞建設と文教政策』と云う題付で注文されてゐる」「書きさしの原稿」とある。(傍点は引用者大西による。)

(おおにし まさみち 教育学部)

2003年10月15日受理